

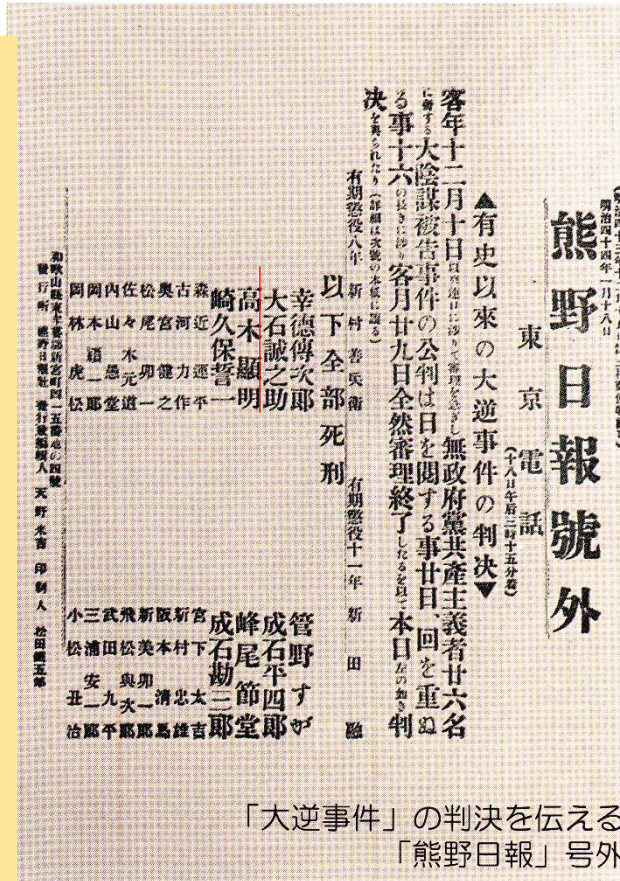
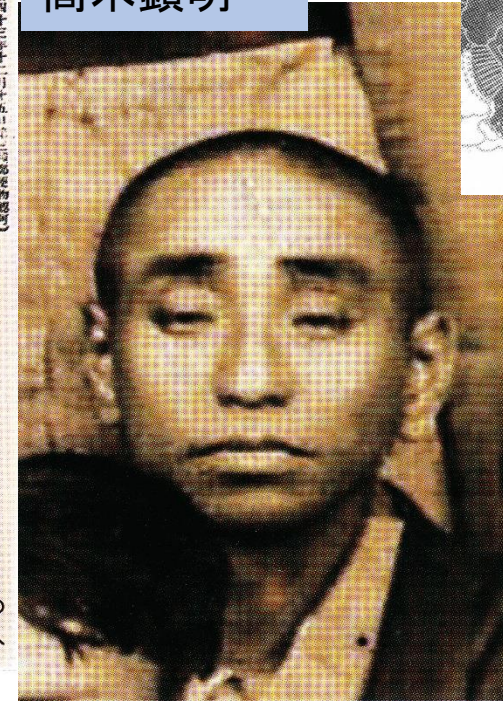
教祖の教え—いちれつきょうだい

「大逆事件」を背負った女の一生 — 高木顕明とその娘



高木加代子

高木顕明



「大逆事件」の判決を伝える「熊野日報」号外

遠松山の名は、寺が元は遠州浜松にあったことに由来する。顕明は句会の雅号を遠松とした。

高木顕明
(真宗大谷派遠松山浄泉寺(新宮市)の住職)
明治の終わりごろ、彼はある事件に巻き込まれました。明治天皇暗殺計画「大逆事件」です。全国で26名が起訴され、新宮とその周辺の熊野地方から6名が大逆罪で連座されました。

この大逆罪は「皇族に危害を加えたもの、または加えようとしたもの」に適用されるよう、当時の刑法に規定されていたものです。裁判は大審院(現在の最高裁)の一審のみで、証人の出廷も認められず、傍聴すら許されませんでした。24名に一方的に死刑判決がくだされました。

残された妻と娘は寺で生きることを許されず、名古屋へ出、娘は芸者となり、晩年には天理教の教会長になりました。そこにはどのような思いがあったのでしょうか。

真宗大谷派では、顕明師が自死した6月24日に浄泉寺で遠松忌法要を行っている。写真等は真宗大谷派発行『高木顕明の事蹟を学ぶ学習パンフレット』及び『高木顕明とその娘』(遠松忌法要講演録4—池田士郎)より転載

年代	歳	高木加代子氏の略歴
1901 (M34).08.11	0	杉原みちの娘として愛知県で出生。婚姻関係にない男性との子で、育てる事が出来ず、物心付かないうちに、高木顕明夫妻に引き取られた。
1910 (M43).06.05	9	顕明、警察に身柄を拘束される。人力車で警察に行く時が加代子が見た最後の父の姿。
1911.01.18		顕明に死刑判決(後、無期に減刑)。真宗大谷派は顕明を「擯斥」(家族共々宗派から追放)処分とす。
		義母たし、妹を頼って名古屋へ出る。小学校4年の時に名古屋大須の芸者置屋に引き取られる。
1913 (T2).03		門前町小学校を卒業(加代子の履歴書の記述)。 1914、秋田監獄で 顕明 縊死(いしー自殺)。
1916	17	京都の絵かきに身請けされ、翌年1月に女の子を出産したがすぐに死亡。男性とも別れる。
		その後、岐阜多治見で芸者として花柳界に復帰。
	21	生母杉原みちの姉鈴木よねの縁で、豊橋に移り、「トミ」の名で芸者をする。 1923、義母 たし 死亡。
1927 (S初め)頃	28	浜松に移り、「高代」と改名。後に自分で「浜松一の芸者」とっていたという。
1932	33	料理屋「高代」を開業。
1936 (S11)	37	生母みちが戸籍謄本の取得の事から、天理教の兵神詰所に居るのを知り会いに行く。役場の戸籍掛が「高代」の客で、加代子の名前の入った戸籍が請求されたことを伝えたため。
		この時、みちは別科に入学し、加代子は別席を受けた。
1940 (S15)	40	所属の社分教会が大教会に昇格した時、加代子も奉告祭に参拝し、社の世話人だった南海大教会(在新宮)の山田清治郎と出会い、同氏は加代子が顕明の娘であることを知る。
1947	47	修養科第76期に入学。
1948 (S23).02.27	48	高代分教会を設立し、教会長を拝命。

「『大逆事件』を背負った女の一生－高木顕明とその娘」(『中山みきの足跡と群像』P151.池田士郎.明石書店.2007)より

天理教の教祖の教えの中で、基本的な教理の一つに、人間は生まれも性別も関係なく、皆「いちれつきょうだい」である、平等であるという教えがあります。教祖は一八八七(明治二十)年に御年九十歳で現身を隠すのですが、亡くなっておられます。その教祖が、人間は同じ神によって創られた子どもだから「きょうだい」であるということで、「いちれつきょうだい」と説かれるのですが、これが今日の天理教の基本的な教理の一つとして教えられています。

しかし教祖がこのことを説かれた時、皆さんから感心された、受け入れられたということはありませんでした。教祖が「いちれつきょうだい」と説いた途端に、国家権力から、特に警察から、「天皇も平民である我々も同じ人間なのか」と問い詰められます。それに対して教祖は「高山に育つる木も谷底に育つる木も みな同じこと」と言います。木に例えてお話しをされ、高山とは社会の支配層、谷底とは貧しい貧民や細民と呼ばれるような、もっと言えばえた穢多・非人と呼ばれる人々、もちろん一八七一(明治四)年以降、穢多・非人という称号はありませんが、その尻尾がまだ根深く残っていた時代です、そのような時代に、天皇であっても誰であっても皆人間として同じ魂を持っていると説かれます。それが「けしからん」ということで、教祖は十七、八回に渡って警察の留置所や奈良監獄に留置、投獄をされます。

—中略—

天皇も穢多・非人と呼ばれる人も皆同じ「きょうだい」だと言われた時に、当時の世の中ではなかなか受け入れられなかったのです。しかし、おそらく、天理教のそういうところに加代子さんは惹かれていったのだと思います。

『高木顕明とその娘』P14.池田士郎.2018.真宗大谷派大阪教区教化委員会



右、料理屋「高代」を営んでいた頃の高木加代子。左、天理教高代分教会長としての晩年の加代子(写真提供・鈴木あや) . 『中山みきの足跡と群像』P165

教祖は人間は皆「いちれつきょうだい」と説いたことで、弾圧を受けた。それはなぜなのだろうか。

加代子は父顕明のことを、「えらい和尚」だといひ、その姓「高木」をとっても大事にしていた。それはなぜなのだろうか。

浄泉寺 檀家180戸のうち120戸は被差別部落

高代のお母さんは私と初めて知り合った頃から、よく高木の父はえらい人やったと口癖のように言ってました。だから、私に高木の姓を継いでくれないかと言ったこともあります。それは私にだけ言ったのではなく、他の人にも言ってたようです。それほど高木の姓にこだわっていました(あや女聞き取りー「あや」は加代子の生母の姉の子)。

私が一九歳の時(昭和一九年)、私の結婚問題でお母さんとちょっともめたことがあったのですが、そのとき高木の姓を名乗っていた私に、高木の父は立派な人だった、日本の仏教を背負って立つぐらいのえらい和尚さんだった、政治のことで監獄に入れられて死んでしまったけれども本当は無実だった、と言ってしかられたことがありました。高木の名に泥をぬるなという気持ちだったのでしょうかね。(ふみ女聞き取りー「ふみ」は加代子の養女)(『中山みきの足跡と群像』P163)

浄泉寺の「過去帳」(門徒の死亡記録)には、新宮藩の要職にあった武士の名前が度々登場することです。また同じ「過去帳」に「当所カワタ何某」との記述もあるとのこと。浄泉寺の地名は「馬町」、皮革業に従事していた被差別部落民についての記述です。浄泉寺門徒には、武士もいれば被差別部落民もいたということです。浄泉寺住職・山口範之は、「注目すべきは、その時代において被差別部落の人々が士族の人々と同じ帳面に、同列に記載されていることであり、日本国中に殆ど例を見ないと聞いている」と紹介しています。元々「差別なき平等の精神」があったお寺ということです。(『大逆の僧高木顕明の真実』P38.大東仁.2011.風媒社)

浄泉寺近在の門徒たちは、「Cノ門徒新平民ナルコトヲ輕蔑シテ浄泉寺ニ於テ布教ノ時ニモ彼レト同座スルコトヲ嫌」っていたのです。そして「浄泉寺。[ヨリ]Cノ門徒中ニ[親ク]交ハル事。[大ニ]不賛成」だったのです。

Cは被差別部落の地名を伏せたものです。明治時代、このようなことは浄泉寺に限ったことではないでしょう。新宮へ来た当初は、顕明も同様な気持ちだったはずですが。しかし時が経つにつれ、顕明の悩みは大きくなっていったのです。史料にも、「浄泉寺ニ於テモ殆ント困却致居候」と記述されています。そして前住職時代のやり方を改めようとしたのです。(『大逆の僧高木顕明の真実』P44)

顕明が住職として入った浄泉寺は檀家の3分の2が被差別部落だったという。ただ、この寺の過去帳は、新宮藩の武士も被差別部落民も同一帳面に並べて書かれているというあまり例を見ないものであった。ところが、門徒たちは被差別部落民との同席を嫌っていた。そこに顕明の悩みがあった。

顕明自身も被差別部落の門徒の家に宿泊するとき(遠い門徒の家は寺から20kmも離れていた)には、食事ものどを通らず、嫌なところと感じてしまう自分に悩み、部落改善運動などに参加するが、そこでも外面だけの偽善だと思ってしまう。

また、新宮に和歌山県で最初の遊郭が出来るときにはそれに反対するが、その運動もむなく遊郭は出来てしまう。

沖野岩三郎の小説に登場する顕明は被差別部落の門徒宅で宿泊した夜、何もかもが汚らしく感じられ、「とうとう彼は腹工合が悪いと言って、其晩は何も食べなかった(中略)世の中には食べられないで悲み、着る蒲団が無く困る者が多いのに(中略)斯うまで苦しむとは何事ぞと自分と自分を叱ってみたが、矢張り自分は此の家全体が変な匂ひのする、実に厭な所だと感じずには居られなかった」(『資料集』P99)と、自らの心のなかにうごめく根深い差別意識に呻吟する姿が描かれている。

しかしその顕明は、部落改善運動を進める虚心会で「私は彼の会にも不賛成です。虚心平気でお前達に安際してやるぞ！といふ態度に出られては矢張り軽蔑せられたのと同じ事です(中略)頭の中では排斥して置いて外面だけ体裁善く交際するといふの夫れは少々偽善…先ア偽善ですナ」(『資料集』P100)と発言している。
(『高木顕明の事蹟を学ぶ学習パンフレット』P7)

悩む顕明

また日露戦争を挟んで新宮で最も議論されたのが置娼問題であった。置娼問題とは公営の遊郭が存在しなかった和歌山県にそれを設置しようとするものであった。これは要するに地域活性化対策として軍の兵営誘致とセットで議論され県議会で可決された。和歌山県の政界・実業界・医師会・仏教会まで賛成する中で積極的に反対運動を展開したのが『牟婁(むろ)新報』記者の荒畑寒村、医師の大石誠之助、キリスト教牧師の沖野岩三郎そして高木顕明などである。しかし新宮に遊郭が設置されることが決まり、置娼が現実のものとなる中で遊郭設置を反対する廃娼運動も挫折してゆくこととなる。

(『高木顕明の事蹟を学ぶ学習パンフレット』P4)



三本杉遊郭。1906年に設置された新宮の遊郭に顕明は粘り強く反対運動を行った。(『高木顕明の事蹟を学ぶ学習パンフレット』P4)

教祖中山みきの伝承の中には、被差別部落民との関わりを伝えるものがある。

その中の一つは、子供が教祖の所へ遊びに行ったら、部屋に上げてくれて頭をなでられたというもの、もう一つはその家のトイレを借りたというもの。

この話は池田士郎氏が採取されたものだが、かなり遠慮して書かれているような気がする。

教祖のもとに寄ってくる人の中には、被差別部落民が多かったような気がするし、その家が遠方であれば、当然そこに宿泊することもあったろうと思われる。そこに分け隔てはない。

私の祖母リノは慶応元(1865)年の生まれですが、その祖母が子供のころ、部落の子供たちと一緒にコカンボ(現在の天理高校の西校舎のあたり)を通して、庄屋敷の教祖さんのところへ遊びに行ったそうです。そうすると、まっ白な髪のお婆が、やさしい顔で「よう来たな」と言って、頭をなでて、手鞆をくれたそうです。祖母は生涯この記憶をもっていたようです。教祖さんに好意を寄せていたからでしょうか、このムラでもやっぱり教祖さんのことを「狐憑き」と言う人が多かったのに、あるとき、「天理さんが盛大になったのは、あたり前や」と語ってました。祖母は昭和16年に78歳で亡くなりました。

この伝承によれば、明治の初め頃、被差別部落の子供たちが庄屋敷村の教祖のもとへ出入りしていたことになるが、その当時、教祖は「つとめ場所」と呼ばれる建物の奥の上段の間に終日端座して、より来る人びとに神様の話をしていたといわれている。この伝承を素直に読めば、子供たちは中山家の屋敷地内に入っただけでなく、部屋に上がり教祖に頭をなでられたと考えるべきであろう。だが、こんなことは大和の風習としては考えられないことであった。(『中山みきと被差別民衆』P99.池田士郎.1996.明石書店)

教祖の足跡を物語る伝承は、竜田から竜田川を上ぼり、十三峠越えの手前にある平群町のW地区にまで伝わっている。同所に在住の故Y・末一氏は、

私が子供時分のことやから昭和の二〇年ぐらいやとおもいますが、十三峠を大阪の方から下ってくる人が大勢いました。当時のムラの年寄たちから、あれは天理教の人やと教えられました。そんな折に、誰からやったかはっきり覚えてませんが、昔、天理教の教祖さんがこのムラを通ったとき、御不浄を借りはったと聞いてます。私らは穢れ多い「えた」というて差別されてたんですが、その「えた」の家の御不浄を教祖さんが借りたというので忘れられないのです。

と語っている。教祖は明治五(一八七二)年七月、同地区に隣接する若井村の松尾市兵衛宅へ「おたすけ」に出向き、同家に一三日間滞在して子どもの病気を救った史実がある。その折に、おそらく教祖は松尾宅から、共に熱心に信心するようになった越木塚村の中尾休治郎宅へも行ったと思われるが、この二つの村の間に位置する部落の道を通った可能性は高く、途中で御不浄を借りたという伝承はあながち根拠のない話とばかりは言い切れない。(『中山みきと被差別民衆』P104)

遊女について池田士郎氏は、奈良の遊郭木辻町の遊女屋や丹波市の遊妓屋の主人の名前が参詣者の中に見出せることから、そこで働く遊女たちも教祖に日々の苦しみの癒しを求めていたのではないかという一文を記している。

教祖のもとへ「たすけ」を乞いにくる人が増えた結果、「奈良の木辻口町、櫓屋の五兵衛といえる人、白米五合持参したのが、世界より持ち来た始めでありか」(『松永好松遺稿参考書』)という言い伝えがあるように、遠く奈良からも病人がきていたことがわかるが、木辻町といえば、『奈良坊目拙解』にも傾城(けいせい)町(遊郭)として賑わっていたと述べられているように、江戸時代を通して奈良を代表する遊廓であった。少し想像をたくましくすれば、五兵衛とはその遊女屋の関係者であり、抱えの遊女の病氣快復のお礼にきたとも考えられる。この人物についての推測の当否はともかくとして、こうした伝承が語り伝えられる背景には、当時、教祖のもとに救いを求めてやってくる人びとのなかに、遊里として栄えていた木辻町界隈の人がいたことがわかる。言い換えるならば、教祖の噂は遊廓に身を売られた女たちのもとにも届いていたにちがいない。彼女たちは病んでいた。浅草吉原の遊女の投込み寺であった南千住の浄閑寺では、人権学習のために江戸時代の過去帳(複製)の一部が公開されているが、それを見ると、吊われた遊女のほとんどが二〇歳代の前半までで亡くなっている。こうした現実には奈良の遊女も同じであったからこそ、教祖の不思議な「たすけ」の噂にすがる思いで病の癒しを願い出たであろう。とするならば、教祖のもとへは性の病に苦しむ遊廓の女たちの悲痛な願いも寄せられていたと考えられる。こうした想像が荒唐無稽のものでないことは、慶応三年四月五日から五月一〇日にかけての参詣人を記録した『御神前名記帳』のなかに、奈良の木辻町京屋平吉が参詣にきていることから言えるのではないだろうか。京屋とは木辻町の遊女屋の株仲間一五軒を記録した「木辻町轡之覚」に記載されている京屋庄左衛門のことであり、平吉はその身内と思われる。また同様に、庄屋敷村の隣村ともいえる丹波市の遊妓屋の主の名前も見いだされる。ともあれ、娼妓は稜れ觀念とは別に金銭で売買される性の隷属民として貶められた存在であり、人びとの蔑視のまなざしに晒されていた。幕末の民衆世界を書き残した日記群のなかに、伊勢参りの道中で遊女を買った旅の商人が「女は男より罪深い。女のなかでも、川竹の流れの女(遊女)となるのは、前世戒行の浅かったゆえと思う」と、娼妓に対する当時の庶民意識をつづっているものがある。つまり、彼女たちは二重の意味で虐げられた被差別の民であった。(『中山みき・その生涯と思想』P29.池田士郎他.明石書店.1998)

「極楽の人数」＝「つとめのにんぢう」

高木顕明は、明治37(1904)年に書いた『余が社会主義』という論文を残した。この論文の解説書が2012年に『極楽の人数(にんじゅ)』(菱木政晴－真宗大谷派僧侶.現代書館)という題で出版されている。題名の「極楽の人数」は論文の最後の方に出てくる「諸君、願はくは我等と共に此の南無阿弥陀仏を唱えて生存競争の念を離れ共同生活の為に奮励せよ。何となれば此の南無阿弥陀仏を唱える人は極楽の人数なればなり」から採られている。「人数(にんじゅ)」は、教祖中山みきが書いた「おふでさき」の中に「二号8. せきこみもなにゆへなるとゆうならば つとめのにんぢうほしい事から」など18例あり、ほぼ「つとめをする人」の意で用いられている。菱木氏によれば、「人数」は「その資格を持つメンバーであるという意味の仏教の専門語」とのことで、「おふでさき」のそれもこの意で用いたものと考えられる。

ここでは「社会である。理想世界である」という言葉から始まる部分を読んでみよう。

ここで注目すべきなのは、「他方国上へ飛び出して有縁々々の人々を済度するに間隙のない身となる故ニ極楽と云ふ」という一節であると思う。つまり、浄土の住人となったということは、これまでの苦勞や修行のご褒美にゆっくり休んでいるのではなく、阿弥陀如来と異なる力を身につけて(弥陀と違はん通力を得て)、世界中のあらゆるところへ飛び出して行って、縁のある人を差別と殺戮から平等と平和へと導く者となって活躍する生き方を身につけたということなのだ、と顕明は言うのである。念仏を唱えて気がついてみると、このような楽天的な境地になって(佛心者大慈悲是なりと云ふ心に成って)しまったことが極楽という言葉の意味なのだ、と。

浄土から見て、「他方国上」とは、私たちが暮らすこの娑婆世界もそのひとつである。というより、極楽が社会主義の実践場であるということは、極楽の住人が極楽世界から飛び出して、この娑婆世界で有縁の人を救う活動をするからこそ言えるのである。(『極楽の人数(にんじゅ)』P54.菱木政晴.現代書館.2012)

三つに社会である。理想世界である。諸君はどう思うか。余は極楽を社会主義の実践場裡であると考えて居る。弥陀が三十二相なら今集まりの新菩薩も三十二相、弥陀が八十瑞光(ママ)なら行者も八十瑞光なり。弥陀が百味の飯食(ほんじき)なら衆生も百味の飯食なり。弥陀が応報妙服なら行者も応報妙服(ママ)なりで、眼通で耳通・神足通・他心通・宿命通、弥陀と違わない通力を得て、仏心者大慈悲是なりと云う心に成って、他方国土へ飛び出して有縁有縁の人々を済度するに間隙のない身となる故に極楽と云う。真に極楽土とは社会主義が実行せられてある。(『余が社会主義』より『高木顕明の事蹟を学ぶ学習パンフレット』P13)

「おふでさき」に、「めへ／＼のやしるもろた事なら」というのがあります。「天理教」では「月日の社」は教祖のことで、一人一人の人間も「社」だという解釈はしていませんが、「めい／＼」というのですから、教祖に限らず人間一般に広げて考える事が出来ます。その一人一人が「たすけ一条」の神の心を自分の心として生きるということは、『余が社会主義』の中の「仏心者大慈悲是なりと云う心に成って、他方国土へ飛び出して有縁有縁の人々を済度する」と同じ意味になります。

陽気づくめ(中山みきの教) 六号57. しんぢつに月日の心をもうにわ めへ／＼のやしるもろた事なら
神(月日・親)一体 この世 教祖一体(月日の社) 中山みき 成人(よふぼく)一体(月日の社) 私
(転輪王) \心 たすけ一条 \心 たすけ一条 \心 たすける心

【『ほんあづま』No464一巻頭言】

阿弥陀様は一人も余さず助けるまでは私は成仏しないで働き続けると宣言された方ですから、この阿弥陀様にお継りすれば私は浄土に往生できる、だから阿弥陀様をお願いして助けてもらうのだというのが浄土教なのです。／ところが教祖の場合には、この阿弥陀様である転輪王を私の心の中におさめるのだということで、私が神のやしろになるということは、阿弥陀様にお継りするという阿弥陀信仰とは別ものになってしまうのです。／これは非常にわかりやすいことで、阿弥陀にお継りして往生する信仰と、自分が阿弥陀になって世界一人も余さず助けたいと宣言された教祖とは、信仰がまるで違うのです。

そして教祖の場合、阿弥陀という言葉を使うと、お継りするものであるという先人観が世間一般にありますので、自分みずから世界一人も余さず助けたいと宣言する場合、阿弥陀という言葉を使って転輪王という言葉を使ったほうが誤解が起らなくていいだろうというところから、「てんりんおう」の神名になさったのだろうと思います。

これは教祖の近くで生まれ、教祖にかわいがって頂いて成長したというお道の熱心な布教師—和爾分教会の初代会長がそのお孫さんに話していることなのですが、「教祖は、奈良の坊さんのお話から、仏教の世界で一番えらい神様は転輪王であり、それが阿弥陀様だと聞いたから、神名をてんりんおうにしたのやと伺ったことがある」。

その和爾分教会初代のお孫さんは今でも「私はおじいさんからそれを聞いている」と言って話しているわけです。転輪王は阿弥陀様の別名であり、阿弥陀様になって世界を一人も余さず助けたいのだとおっしゃった、それが神のやしろの宣言ということなのです。助ける心を持った人間の手本を示すと通られたのがひながたなのです。(『ほんあづま』No.166.P4)

大逆事件の発端になった『無政府共産』という小冊子には、天子は決して「神の子」でもなんでもない、小学校の教師などから騙されているだけだ、などと説かれていた。それと同様に、教祖は「天皇も他の人間と同じ魚介の魂の持ち主だ」と説いた。

明治20年1月13日(陰暦12月20日)、教祖がおつとめの実行を急き込まれる中、真之亮他がおつとめが出来ない理由を述べる場面があります。

引続き真之亮「このやしきに道具雛型の魂生れてあるとの仰せ、このやしきをさして此世界始まりのぢば故天降り、無い人間無い世界拵え下されたとの仰せ、上も我々も同様の魂との仰せ、右三箇条のお尋ねあれば、我々何んと答えて宜しう御座りましょうや、これに差支えます。人間は法律にさからう事はかないません。」

教祖「さあ／＼月日がありてこの世界あり、世界ありてそれ／＼あり、それ／＼ありて身の内あり、身の内ありて律あり、律ありても心定めが第一やで。」

「おさしづ」が公刊されたのは1927(昭和2)年なのですが、それ以前1916(大正5)年に発行された『山名大教会初代会長夫婦自伝』が1958(昭和33)年に年齢を満で数え直すなどし、『夫妻自伝』とした改訂版が出ました。内容には手を加えていないようなので、それをみると、この部分は

中「この屋敷に、道具衆の魂生れてあるとの仰、この屋敷をさして、此の世界始まりのぢば故、天降り、無い人間、無い世界を拵へたとの仰、一天万乗の君様として、神の御魂と心得居ります所、我々同様、魚介の魂との仰、右三ヶ条、一統の者より御上様へ申上ましたら、我々何と答へて宜敷御座りませうか、差支へます。人間は法律に逆ふ事は叶ひませぬ」

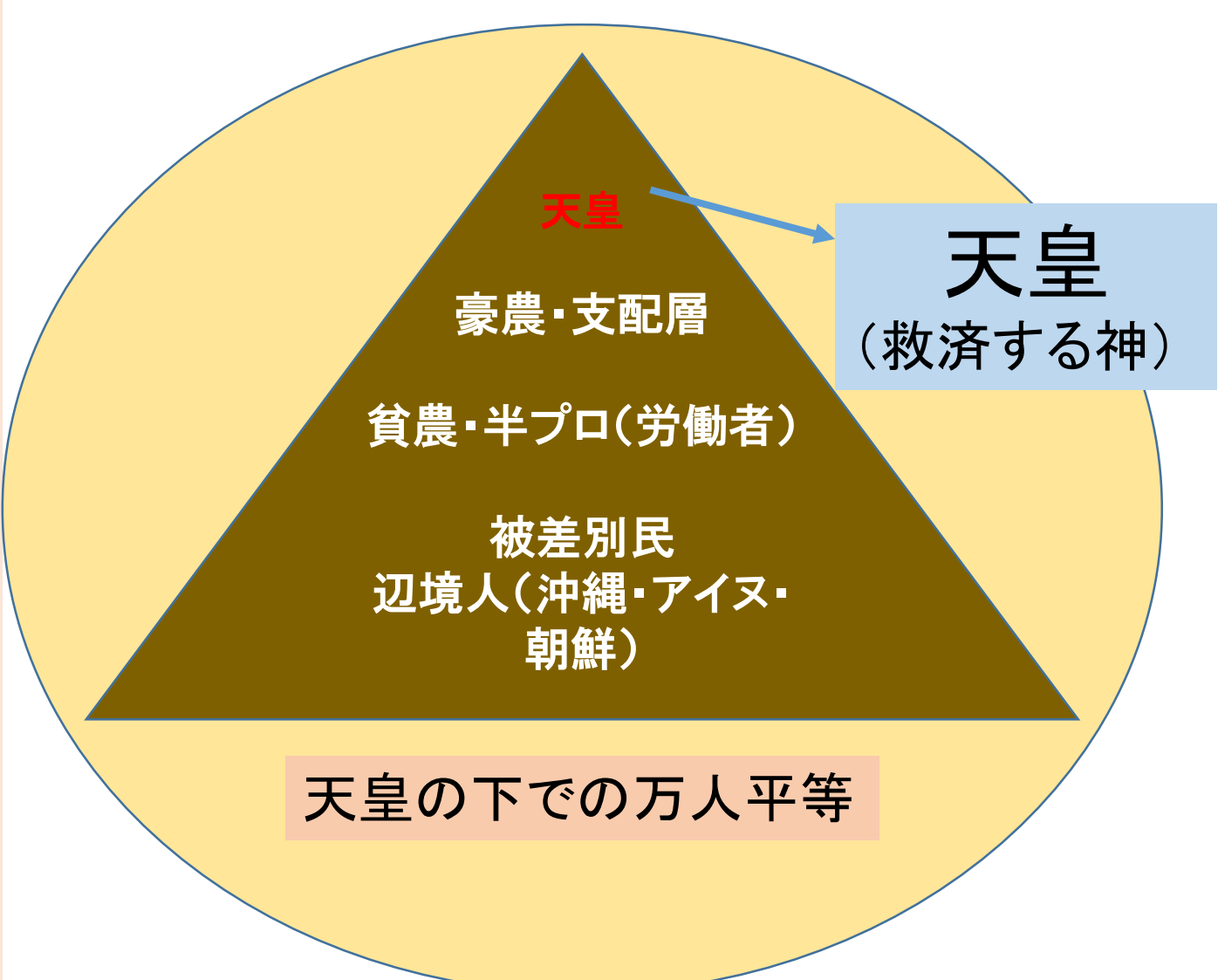
神「月日あつて此の世界あり、世界あつて夫々あり。夫々あつて身の内あり、身の内あつて律あり。律あつても心定めが第一」

となっています。

本部版の「上」以下が、「一天万乗の君様として、神の御魂と心得居ります所、我々同様、魚介の魂との仰」となっていて、「天皇の魂は自分達と同じで、魚介の魂」だと明快です。

天皇を日本神話の神々の子孫として神格化しようとする当時の政府にとって、このような天皇もそこら中にいる人間と同じなどということは到底許されることではなかったのです。

幕藩体制が築きあげた、制度化された民衆支配の構造は、このように明治国家によってひきつがれる。明治以降、それは民衆の三層構造という形になります。豪農クラスと貧農・半プロ層と被差別民・辺境民という形で、お互いが憎みあい、競争しあい、足のひっぱりあいをするように仕向ける、そしてその一つ上のところに救済を求めさせる、最後にはそれをすべて一視同仁の天皇のもとに集中させるようにします。だからアイヌも、沖縄の人も、被差別民も、誰からも救われることのないどん底の民は、最後の救済を求めて天皇陛下に解放の幻想をよせていくわけです。つまり天皇制というのは、目に見える形では無数の政治的・社会的な差別序列構造ですが、目に見えない裏側の世界、幻視の構造としては、天皇の下での万民平等、天皇によってすべてが平等に救済されるという一つの円環構造をなしているわけです。一つは差別のピラミッド構造、一つはこういう救済の円環構造、これが裏と表あわさって天皇制というものを成り立たしていたのです。それは明治国家によって再編成され、大正、昭和と続いてきたわけです。だから沖縄戦のときの、あの悲痛な鉄血義勇隊やひめゆり部隊の少年、少女たちの献身が生れたのであり、その意識というのは、こうしてつくられた円環構造的な天皇制幻想による悲劇だと私は思うんです。
 (『同時代への挑戦』P139.色川大吉.筑摩書房.1982)



ピラミッド型の差別構造の現実の社会を、「天皇の下での万人平等」という幻視の円環構造で覆っていたのが天皇制である。

現実の世界

神

この世は神の体

かぐらづとめ = 陽気づくめ(理想の世界)の疑似体験

四号62.
このよふを
初た神の事ならば
せかい一れつ
みなわがこなり

三号40. 135
たん／＼と
なに事にても
このよふわ
神のからだや
しやんしてみよ

理想の世界
極楽世界

神から見れば
みなわが子

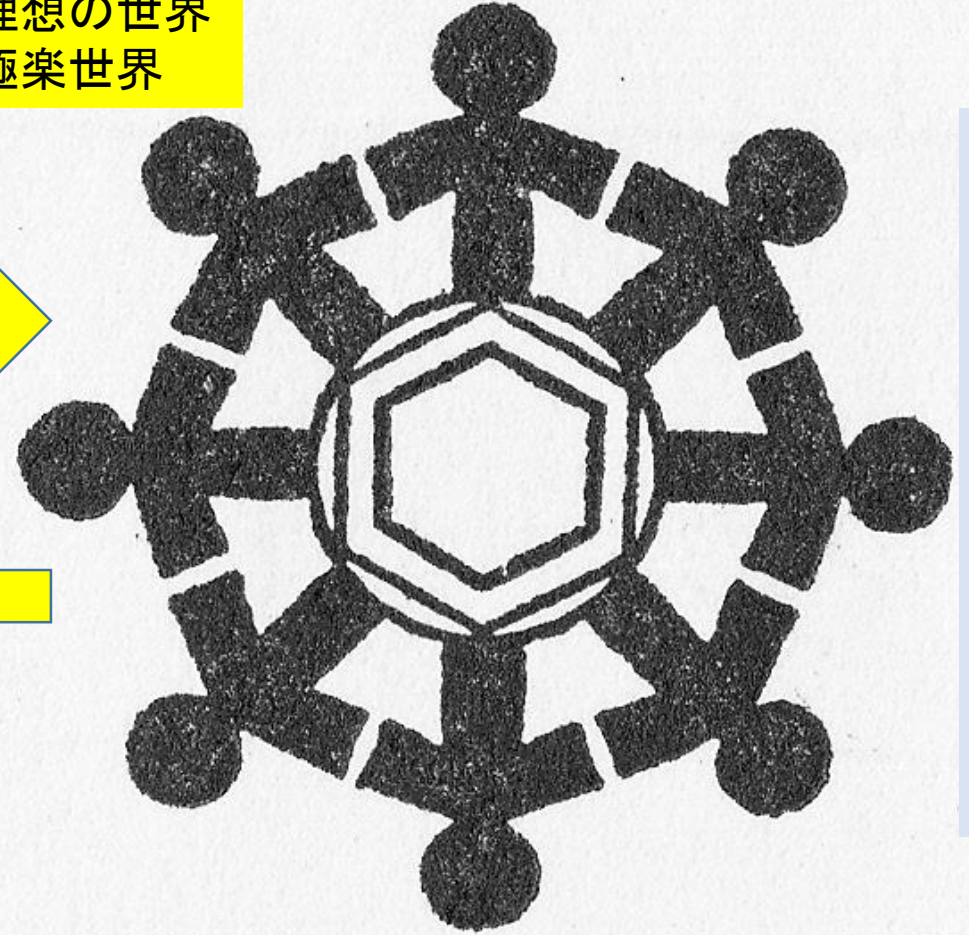
天皇

豪農・支配層

貧農・労働者

被差別民
辺境人(沖縄・アイヌ・
朝鮮)

魚介の魂
神から見ればみな平等



四下り目九ツ
こゝは「このよの」くらくち
わしもはやばやまぬりた

中山みきの世界観 - つとめ人数(にんぢう)によってこの世界に極楽世界を実現する

池田氏による天理教者の聞き取りからは、高木加代子が天理教に入信したのち、親不幸のいんねんを悟ったというようなイメージになるが、本当は父、高木顕明の思想の一端をその教えの中に見出したのかもしれない。